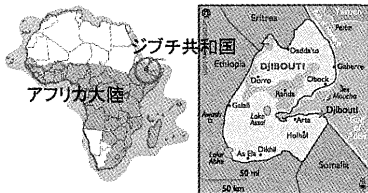


ジブチ共和国海上輸送力増強計画 40m型フェリーの引き渡し

1. はじめに

国土がタジュラ湾を囲んで南北に分かれているジブチ共和国では、首都と北部地域の道路輸送網が山岳地帯のため発達しておらず、北部地域と南部の経済格差が同国の懸案事項のひとつでした。ジブチ国政府は、南北経済格差の是正と北部住民の民生の改善のため、1981年、ドイツから供与されたフェリーボートで、ジブチ港を基点として対岸のタジュラ、オボックへ週2回ずつの振り子配船を開始し、住民及び車両等貨物輸送をおこなってきました。



しかし、同フェリーが老朽化のため、2004年7月からはフェリーの老朽化により運航を停止し、南北間の輸送需要に応えられなくなり、北部地域は深刻な水、燃料等の生活物資の輸送力不足に直面して、今の物資輸送には不向きなかつ運賃の高い、ダウ船等の民間の船舶輸送及び非効率な道路輸送に依存せざるを得ない状況にありました。



こうした背景の下、安価で安全な定期フェリーの復活により、社会インフラとしての交通網を整備し、人・物のスムーズな移動を促すことにより、地域間の経済格差を是正することが緊急の課題として、ジブチ国から我が国に対して海上輸送力増強の為の無償資金協力が要請されました。

2. 基本設計調査および施工監理

その後、JICAによる2度の事前調査を経て、当センターがJICAの委託業務として2007年5月から6月にかけて基本設計調査を実施し、それに基づき、40m型フェリーボートの建造が決定されました。

フェリーの基本設計は当センターが行い、車両の乗船、下船は船首ランプで既存の傾斜岸壁を使うという港湾事情を考慮した特殊船体形状を採用しました。ま



ジブチ共和国向け40m型フェリー完成予想図

た、フェリーは現地では平穏水域、かつ日中運航を前提としたため、宿泊設備を持たない仕様となっています。そのため、自力による長期間の大洋航海には不向きとなっており、建造地の日本国から現地までの輸送が問題となりました。タグボートによる曳航や、港づたいの自力航行等も検討されましたが、最終的には重量物運搬船による貨物輸送することとしました。このクラスの船舶を4点吊りすることは非常に珍しく、船体強度等十分な検討がなされました。

造船所建造中の施工監理を行うにあたり、当センターはJICAの推薦を受けて、ジブチ共和国の実施機関である海事局のコンサルタントとして契約を結び、入札業務支援、建造監理の業務を行いました。入札の結果、北浜造船鉄工／三協テクノ共同企業体が落札し、青森市合浦の北浜造船鉄工（株）の工場にて2008年9月19日着工、2009年6月23日進水しました。

進水式はジブチ国関係者、国内建造関係者の出席および、久々の青森県での造船所での進水式ということで、地元小学校児童の見学のもとで、華々しく行われました。



その後、艀装工事、試運転・各種調整を経て、同年8月31日竣工し、青森から横浜港に回航後、同年9月17日に横浜港山下埠頭で重量物運搬船「KAMO」に搭載され、一路ジブチへ向け出航しました。



ジブチは紅海の入り口にあたり、スエズ運河を利用する船舶を狙った、海賊が出没する地域であり、この時期には海上自衛隊から日本船舶の護衛に護衛艦が派遣されていました。

アデン湾ではこうした、海上自衛隊の護衛艦のエスコートを受け、同年10月12日、無事にジブチ港に到着しました。

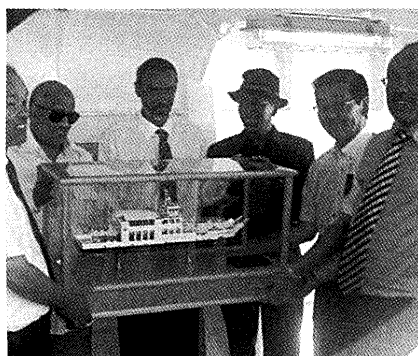
3. 現地における引き渡し式典

現地での調整や乗組員の訓練を経て、同年10月22日に、ジブチ港でテープカットの記念行事の後、タジュラ港まで初就航の記念航海が行われ、タジュラで盛大な祝賀式典が行われました。そのときの模様を紹介します。

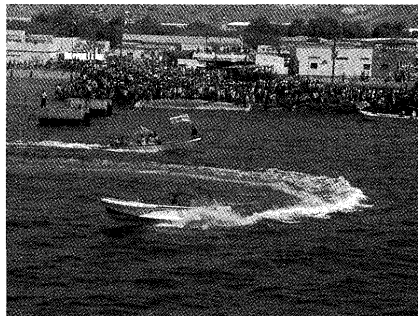
10月22日、いつもはごみの散乱するジブチ港のエスカルフェリー桟橋・ターミナルもきれいに掃き清められ、テントの式場が設営され、黒山の人ばかりでした。日本側の在ジブチ日本大使館、JICAエチオピア事務所、JICAジブチ事務所、JICA専門家、そして海上、航空、陸上自衛隊の関係者や、ジブチ共和国側のアリミラ海事局長やアライタ・アリ在日ジブチ大使らの見守るなか、ジブチ首相、運輸大臣、政府関係者、能化大使によるテープカットがフェリー「モハメド・ブルハン・カシム号」船首ランプで行われました。そのあと、約150名の参加者がぞろぞろとフェリーに乗り込み、ジブチ港内を低速運転で通過した後、一路、タジュラ港を目指しました。船内では、日本大使館員が、「ジブチの指導者層が、こんなに多数、一同に会したことはこれ



まで見たことがない」と驚いていたほどでした。航海の途中で、アリミラ海事局長が「これから船の模型の贈呈式を行う」と言うので、持参した本船の模型の梱包を解き飾り付け、テレビ局のカメラの前で、アリミラ海事局長が音頭をとり、造船所が首相、運輸大臣、アライタ・アリ大使に贈呈するというシーンを演出しました。



タジュラ港が近づくにつれて、大変な人だかりが待ち受けていることに、船内では驚きの声が上がりました。



港に着き、フェリーの船首ランプが静かに下ろされると、待ちかねた大群衆に向かって手を振りながら、タジュラ出身の首相を先頭に、船内の関係者がゆっくり上陸をすると、途端に大群衆にもみくちゃにされました。



ターミナルから、わずか100m離れた祝賀式典ステージまで、途中、あちこちで歓喜のダンスが披露されテントの中にしつらえたステージを囲む席に関係者が全員着席し、民族衣装に着飾った綺麗どころをはじめとする大観衆がステージ周辺を取り囲む中、「モハメド・ブルハン・カシム」号の就航祝賀式が午前11時に始まりました。



タジュラ県知事やOkalとよばれる酋長ら、地元の要人らの挨拶のあと、アリミラ海事局、運輸大臣、アライタ・アリ駐日ジブチ大使、能化日本大使と祝賀スピーチが続いてから、アップテンポの民族音楽が流されると大観衆が全員喜びを爆発させたかのように踊り出し、ようやく曲がおさまると、最後に、地元タジュラで絶大な人気を誇る首相が演説を行い、約1時間の式典が無事に終了しました。



こうして、ジブチの人たちが待ち望んでいたフェリーがいよいよ2009年12月10日から定常運航を開始することになり、同国の北部地域への経済社会生活の活性化に寄与することが期待され、このような国民・民衆一般に非常に喜んで貰える事業に参画できることは、非常にやりがいがあります。

(海外協力部 小川 賢)



モハメド・ブルハン・カシム号